

◆連載

いま留萌むかし 第二十三話

●旧制留萌中学校の誕生

大正十四年一月二十五日付の各新聞は競って大留萌建設事業の竣工を祝う記事を掲げた。そのなかで、大留萌建設事業のなかでも将来の人造りの拠点として設立された留萌中学校の校舎建設の記事も紹介されている。

「天塩沿岸に唯一の中学校 留萌町民の誇り」
「落成したる留萌中学校」
「大留萌建設土木工事 留萌中学校校舎 留萌郵便局舎落成に就いて」
「落成を告げた 留萌中学校 総工費実に七万五千元」
などの見出しが当日の紙面を飾っている。

そのなかで当時の留萌支庁長高井幸次郎談として次のような記事がのっている。

「中学校の施設も順調な歩みで進んでいることは、誠に喜ぶべきことで、従来多くの物質面に最善の努力を払われたるも、今後は更に物質的施設

計画と併進して各方面に精神的な啓蒙を計り真の文化的施設を促進し、時代の趨勢に遅れざらんことを期さねばならない。留萌町はただ留萌町の留萌町にあらずして天塩全域の文化の中心、経済の枢軸として一大発展を遂げねばならない。」

この談話は当時の留萌人がただ端に留萌の経済的發展ばかりではなく、同時に将来の留萌を担う人材の養成をも念頭に置いた大留萌建設事業を遂行しようとする意志が明確に示されているのである。

留萌中学校の設立問題は留萌の築港工事が始まるとともに、懸案事項として推進されてきた問題であった。昭和十三年一月二十九日付で町立中学校設立を申請し、同年三月二十六日付で文部省認可、四月十七、八日入学試験を行い、百三名が合格し、第一期生となった。四月二十九日留萌尋

常高等小学校の仮校舎で入学式をとりおこなった。
校舎敷地は留萌市街南五条東一丁目間に置き、六月二十五日工事に着工し、十一月三十日完工した。総工費七万五千四百五十四円四十一銭であった。翌大正十四年四月一日にははれて念願の道立移管が実現し、天塩管内唯一の北海道町立中学校が誕生した。この中学校の設立によって、留萌町は名実ともに北海道西海岸の経済、交通、文化の中心地として歩み始めた。留萌町民の心には将来への希望が風船のようにふくらんでいたことだろう。

事実、当初留萌の人造りの拠点としてスタートしたこの学校の卒業生は、その後の留萌の発展に寄与した人も多い。また、中央へ雄飛し、残った留萌町民の誇りとなる人もたくさん輩出している。開校以来の校則は

「流汗悟道」と「報本反始」(始は「克忠克孝」)で、勤勞努力によって、道を悟り、開校とその精神に対する報恩の思いを忘れないということであった。

この留萌の多くの人材を育てあげた旧制留萌中学校も日本の敗戦とそれに続く学制改革によって新制高等学校(留萌高等学校)へと受け継がれた。



旧制留萌中学校

るもい

●特集 健康で豊かなくらしを守るために。

昭和63年8月発行・留萌市編集・企画振興会印刷・白鷺印刷株式会社

1988

8